あくまでも自分史として

「岳陽」と共に

第 44 号
発行日
2025.01. 30
編集・発行
井上講四／堂本彰夫
※連絡先
〒901-2225
沖縄県宜野湾市
大謝名 3-13-24
教育協働研究所
～岳陽舎～
（井上講四宅）
Tel:098-963-9282
E-mail:
gakuyou17@outlook.jp

○これは、書かずにはおられない！まだまだ脈はある？

あっという間に、一月が過ぎるが、先日（18日）突然、これは是非書いておかなければと思わせるテレビ番組があった。ある意味お馴染み？の「新プロジェクトX～挑戦者たち～この国には、誰にも知られず輝く人々がいる。」であるが、今回の見出しには、「緊急派遣5千人日本メーカーの総力戦～タイ大洪水国境を越えた復旧劇」とあった。もちろん、これだけではよく分からないであろう！ネットを見てみると、「メードインジャパンを支える心臓部が巨大洪水で水没！そのとき、生産を守るために立ち上がった人々がいた…。2011年10月、タイ中部を襲った洪水は被災230万人。半導体から家電、自動車まで日系400社以上の工場が生産設備ごと水に沈んだ。そのとき工場のリーダーたちは、生産設備を水中から引き上げ、5千人のタイ人従業員とともに日本へ派遣、生産を再開させる、前代未聞のプロジェクトに挑んだ。国境を越えた物語。」とあった。

で、番組の紹介としては、これでよいであろう！だが、私は、現地工場の日本人社長やジェトロの担当者の人間性、そして現地労働者との絆、改めて、そういうものに注目したいのである（何とも感動的なものであった！）。余計なことかもしれないが、この話（映像）は、今の日本人（否、世界中の人々）に、是非とも聞かせて（見せて）欲しいものである！

しかるに、日本は今、政治・経済・教育等の面で元気がない？しかも、以前まではうまくいっていたものが、そうなっていない？だから、自信喪失ともなっている？だが、この話に出て来る日本（人）の良さ、外国（人）との関係を知ると、まだまだ脈はある（自信回復できる？）？そう思うのである！

○やはり、これは、上だけでは収まらない！

翻って、ここでは、もう少し、上の記事と関わることを書いておきたい！やはり、上の文章だけでは収まらないということでもある！と言うのも、話題がタイということもあるが、私は、遠い昔の？H大学での助手時代を思い出したのである。詳しいことは、ここでは書け（か？）ないが、私の所属する研究室（比較教育制度学）は、当時（今はどうなっているか知らないが！）、東南アジアからの留学生（大学院生）が沢山いた。その中に、タイのWさん一家もいたが、自分で言うのも烏滸がましいが、精一杯のお世話をさせてもらった！互いに家族持ちという境遇がそうさせたのかもしれない（貧乏所帯にも拘らず！）。

彼らとの思い出は、今でも幾つか残っているが、ある時、旦那さんが一足先に帰国していたので、残された奥さん（彼女もまた院生となっていた）と娘さん二人を、夏休みだったと思うが、少しでも喜ばせようと、妻の実家（S県）に連れていったことがある！義父母は驚いていたが、最後の夜に、件の奥さんが、自国料理を作って、感謝の意を告げたことを覚えている（今回は、そのことを思い出させてくれたのでもある！）。帰国後の彼らのことは、ほとんど知らないが（家族としては？であったようだが）、本当に掛け値なしに、人間対人間として付き合ったものである！

要は、ここで言いたいことは、そうした関係は、自分が助手だからということではなく、目の前の現実において（私も、その時は一児の父親であった！しかも、一年という限定での助手生活であり、将来の見えない不安定な身分でもあった！）、極自然に振舞っていたということである！

○改めて、「成人式」に思う！イニシエーションの意味？

さて、もう随分日数が経ったが、今年もまた、各地で成人式が行われていた。私は、その様子をテレビ等で見ていたのであるが、相変わらずの晴れ着姿（特に娘さん達の！）と、新成人としての決意（心構え）を告げるコメントを眺めていた。そこには、表面的にはいつもの？、平和な日本が映し出されていた！必要以上に、事を深刻に受け止めることはないであろうし、たとえそうであったとしても、この日ばかりは、彼らの輝かしい門出を祝うことは、それなりに許されることであろう！痛ましい事件や事故、あるいは悲惨な戦争や災害等が、国内外で相次ぐ中、そうした光景は、ある種の癒しであり、束の間ではあるが、社会の安寧を感じさせるものでもある（多少、無理矢理感？がないわけでもないが？）。

ところで、あるネット記事（新聞記事）によると、「かつて『荒れる成人式』として話題になったO県（敢えて伏せる！）の多くの自治体で12日、『成人の日』の式典が行われた。県は『さまざまな取り組みが奏功し、近年は落ち着いている』（担当者）とみているが、O市（これも、敢えて伏せる！）の式典会場ではこの日、改造車やバイクの爆音が鳴り響く一幕もあった。全体から見ればごく少数ながら、奇抜な髪形や衣装が目を引く〝やんちゃ〟な若者は今も健在のようだ。」とあった。確かに、そう言われれば、そうなのであろう！「〝やんちゃ〟な若者」は、いつの世にもいるのであるから⁉

そこで、思うことは、その「やんちゃ」についてである！我々は、かつて（今もそうなのかも？）、「若気の至り」「若者気取り」「身の程知らず」とか、よく若者（青年）の傍若無人ぶりを評してきたものである。そうした中で、「成人式」は、彼らの力や勇気の誇示、大人社会へのイニシエーション（通過儀礼）の場であったが、豊かな社会（都市化社会）では、その要素がなくなっている（地域／コミュニティの変質）⁉ちょっと変な話ではあるが、沖縄でいう「うーまくー」（やんちゃの子）の卒業の場が、それになっているとしたら、それはそれで意味があるのかもしれない⁉現象的には、甚だ厄介（迷惑？）ではあるが、皮肉にも彼らだけが、それを継承（内在化）しているのかもしれない？（井上）☜

○「ユニバース２５」？それが指し示すものは？

今度は、私堂本の番であるが、標記の「ユニバース２５」について、以前書いたことがある（第３５号）。実は、過日、それを紹介していた、ＮＨＫの「フロンティア」という番組の再放送をみたのである。そこでは、改めて、人類繁栄の原因（原動力）が、「協働性」にあることを確認したが、後半にあったある実験のことは、ほとんど忘れていた⁉それは、Ｊ・Ｂ・カルフーンという動物行動学者が行ったものであるが、人口密度とそれが行動に与える影響についての研究である。彼は、げっ歯類（ラット）の過剰な個体数が及ぼす悲惨な効果が、人類の未来にとって悲観的なモデル（最後には絶滅？）であると主張していたそうである！

その有名な実験が、件の「ユニバース２５」ということであるが、その中で、彼は、ラットの、過密状態での異常行動を「ビヘイビア・シンク」（生物個体の過密状態による行動の崩壊）、社会的な相互交流を諦めた受動的な個体を「ビューティフル・ワン」と名付け、それらの個体の行動変容が、結果として、彼らの絶滅をもたらすということを発見していた（詳しい説明はここでは出来ないが！）。ただし、彼は、こうした実験を人類に当てはめれば、滅亡が確実だとは考えておらず、建築的環境の改良による「人間福祉」（human welfare）の改良を目指したということである。そして、その研究は、「世界的に認知されるようになり、彼は世界中の会議で講演し、ＮＡＳＡや地域の刑務所の過密状態のコロンビア特別地区委員会などのさまざまな組織から意見を求められていた」そうでもある。

しかるに、彼の研究は、Ｅ・Ｔ・ホールの「プロクセミックス理論」（人の個人的距離や社会的距離を著した理論）の基礎として用いられたが、当時から生物学者や生命科学者から疑問や批判を受けており、現在では科学的証拠や客観性が不足しているとも考えられているそうである。だが、爆発的な人口増加を進めている我が人類のあり様が、そこから見えてくるような気もするのは私だけであろうか⁉

○「偽善と露悪」の繰り返し？だが、「偽悪」もある？

ここでも、あるネット記事（JBpress）からのものであるが、面白い表現（捉え方）に出会った。それは「露悪」というものであるが、人間社会の歴史は、その「露悪」と「偽善」の双方の繰り返しであるというものであった。現在、「損得勘定、分かりやすい合理主義や行き過ぎた資本主義」が横溢する中で、「日本は世のため人のためという価値観が根強く、子や孫の世代、あるいは先祖、さらには世界の人々をも思いやることのできる『美しい国』だったはず…それは偽善的だったかもしれませんが、真実とは結構歯切れが悪く、曖昧なもの…その曖昧さも含めて、他を思いやり、美しく生きるのが日本人の伝統であり美意識だった…そこが外国から敬意を払われる部分でも…」とあったが、利己主義と利他主義の相対の中で、人間社会（日本）は、まさに偽善と露悪の繰り返しを行っているということであった。そうかもしれないが、その双方に違和感を感じ、自らを「偽悪」と言うことで生きていた若者達が、かつていた（今もいる？）ことを忘れてはいけない！

〈短歌に託して～「今」を生きるしかないのだ！～〉

・誰にも知られず輝く人々！
**　そうなのだ！　そういう人達がいるのだ！**

・思い出したくないものもあるが
**　そうでないものもある！　それを教えてくれる人？**

・成人式！　単なる儀式ではあるが
**　束の間の己を　それに賭ける者ある！**

・ユニバース２５　不吉な実験とも言えるが
**　そこに真ある？　ならばどうすれば？**

・偽善と露悪の繰り返し？　そうだとしても
**　若き日の偽悪もある？　それは何？**

〈特別コーナー～堂本彰夫の古代史旅枕 ㊹～〉

○改めて、古代九州の全体像を探る－その１５－

というのも、「記紀」に示されている継体王統は、それを「継体」したとする（５世孫…こんなことはあり得ない？）「応神王統」の後継王統である！そして、彼らは、その応神王統の最後の王、あの悪名高き「武烈天皇」の暴虐ぶりを示して、自らの正当性（辛うじての正統性？）を主張している（中華の国史にはよくあるパターン？易姓革命思想）⁉ということで、前号 ㊸ では、さらなる大変な展開となってきたが、改めて、彼（継体／軍君／男弟王）は、かの第２５代百済王「武寧王（斯摩）」の（義？）叔父であり、その彼（斯摩）から、有名な「隅田八幡人物画像鏡」（現在、和歌山県橋本市の「隅田八幡神社」に所蔵）を贈られているともされている⁉この辺のことは、まだまだ詳しく解明されなくてはいけないのであるが、要は、「継体」という人物（天皇）は、かなりの謎（矛盾？）を秘めているということである！

しかるに、『「二中歴（九州年号）』から推測される「武烈天皇」とは、本来の？「継体天皇」の別称でもあるとされているようであるが、先の㊶との絡みで言うと、彼は、記紀に言う「継体天皇」と「物部麁鹿火」によって政権を簒奪？された「筑紫君磐井」ということはないか？もちろん、その場合、「武烈」は、正統な王統であった「磐井」の虚像であったということになる⁉つまり、「磐井（武烈？）」は、貶められて当然の「暴君」であったということを主張（捏造）したいがためである⁉

でも、「磐井」自体は、「武烈」ではなかった！何故なら、「磐井」は、『宋書』に見られる「武」の後裔（嫡子？）と見られるが（かの「松野連系図」には、共に名があり、磐井に相当する人物には、「哲」という名が与えられている！）、かの八女地域（岩戸山古墳等）に、別途安定した王権を営んでいた！問題は、いつ、どのように、その九州倭国が変貌していったのかである⁉考えられるのは、徐々に、その勢力を増していった「豊国倭国」（筑紫倭国の分国、台与の類族達？／中心地は、田川／香春神社周辺？→「秦王国」？後に、京都郡や宇佐地方に移っていった？）の動きからということである⁉　（つづく）（堂本）

〈編集後記〉今回の新年も、あっという間に一月が過ぎようとしている！ご多分に漏れず、ここ沖縄も一番寒い冬を迎えているが（多少笑？）、来月は、プロ野球の春季キャンプが各地で始まる！運動を兼ねて可能な限り訪れたいが、来客（卒業生達）もある！私達にとっての蠢動とも言える⁉（井上／堂本）